

## サブテーマⅡ 「西川はま子の歩んだ道」

講師 杉田 静山

私は青年時代、年が19歳から25歳まで、6年間をこの学校、近江兄弟社学園で働きながら勉強を続けました。西川はま子さんも12年間、この学校で働いておられ、3年間は、私と一緒に。だから私はこの学校には、思い出が沢山あります。懐かしい場所で、只今、思い出話が出来たのは本当に幸せであります。

私は中学校1年のとき、病気で熱を出し、翌日目を覚ましたら、耳は全く聞こえませんでした。続いて戦争でB29の爆撃で、大阪の家が焼けて、滋賀県へ移りました。65年昔のことです。戦争が終わっても、食べるものも、着るものも不自由な生活でした。私は近所で竹で籠を作っている人を見て、おもしろいなあ、と真似をして毎日籠を作っていました。2年後、聾学校の話を聞いて、入学しました。しかし、読話はむづかしくて一向に上達しませんでした。これでは学習が進みませんので、普通の高校に進学したくなって入学の相談に行きましたが、どこの高校でも「聞こえないようじゃ教える方法がありません」と、相手になってくれませんでした。

そのとき西川はま子さんが、聞こえない身で近江八幡の高等女学校に入学され、卒業された話を思い出し、はま子さんに相談してみたのであります。その手紙がはま子さんの生涯の「心の母親」と言われた、この学校の創立者で校長の一柳満喜子先生のお目にとまり、面接のチャンス頂きました。先生は私の勉強したい気持ちをいろいろたずねられ、それ程勉強がしたいのなら、この学校に来てみたらどうか？ 生徒としては無理だが、学校でタイプライターや謄写版を使って働く気持ちがあるなら、仕事の余暇には分からない勉強は見てあげようとの提案でした。

先生は「耳が悪くても出来る勉強があります。それを探して努力することが大切です。そして社会で人との付き合いの中で、人間生活の実際を学んで行くことです」と言われました。先生は鉛筆をとってスラスラ紙に書いて下さいました。「今日はお話が良く分かるように筆談で致しましょ



う」と60年前、先生との出会いの筆談です。いつも何処へ行っても冷たい返事ばかり貰っていた私には、先生の温かいお言葉に目の前がぱっと明るい光が差して、胸が希望で一杯になりました。

この筆談紙は60年昔のもので、今は色が変わって読みづらいです。先生との6年間の筆談紙は読み返してみると、タイム・トンネルをくぐって、今も目の前に先生がおられて話し合っている気持ちです。

さて、私の見た西川はま子さんですが、私の仕事場、タイプ室から廊下を隔てて事務室があり、はま子さんは4.5人の同僚と働いておられました。私は、一日に何回となく事務室に出入りしておりましたし、はま子さんとはお昼も一緒によく頂きました。でもはま子さんの本当のお仕事は何であったのか、今でもよく思い出せません。

事務室におられても一般の事務にはタッチされなかったようです。はま子さん自身は満喜子先生（私たちは一柳園長をそう呼んでおりました）の秘書だと説明しておられました。しかし、学園の組織には秘書という役割はなく、はま子さんは幼稚園の普通免許状をもっておられたので、学園幼稚園の所属でした。満喜子園長の秘書を自負しておられただけに、園長のはま子さんへの信頼は絶大でした。

先生は園長室にはま子さんをよく呼んでは、いろいろ指示しておられるのを私は見知っており、その息の合った応答には、これが聴力障害者だと

いう匂いは微塵も感じられませんでした。いつ見ても「うまいもんだナー」という印象が脳裏に焼き付いています。

学園の建物に住み込んでおられたはま子さんは、事実上この学園の建物の管理者でもありました。私は満喜子先生から特別訓練を受けたこともあり、朝早く登校した日もありましたが、はま子さんは幼稚園から高校までの重い鍵束を持って、キャンパスを往来しておられる姿によく出会いました。「学園の鍵はみんなはま子さんに預けてあるから安心だ」、満喜子先生ははま子さんへの信頼を、よくこんな言葉を使って説明しておられました。

学園高校には、「24時間訓練」といって女生徒が、順番に学校に泊まり込んで生活訓練をしておりましたが、はま子さんはその責任をおって一緒に寝泊りしておられたようでした。男子の私には直接見ることはできませんでした。はま子さんの部屋も一度覗いてみたかったのですが、その機会がありませんでした。

私は人の本箱を覗いてその人の人生遍歴を推し量る癖がありました。いつか要らなくなったからと、リーダーズ・ダイジェスト1年分位貰ったことがありました。又、手作りの仕事が好きだったようで、「暮らしの手帳」の木工の図面集のような本や、女の人には珍しく私用の新品の鉋や、鋸の大工道具を見せて貰ったこともありました。

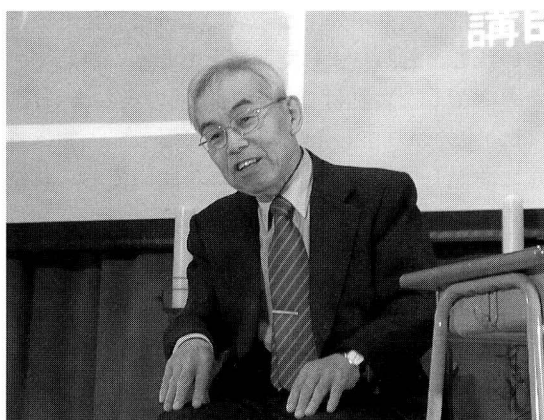
はま子さんの筆跡は美しいものでしたが、文章力も立派なものでした。堺壘学校の先生が、はま子さんの文体を詳しく調べ、研究発表しておられますが、書き残された文体を研究するのと、文を書いておられるのを、直接傍で見ているのでは、受ける迫力が全く違うのです。

はま子さんの残聴に付いてはいろいろ意見があるようです。ろう教育誌でも、全聾だという人もあれば、かなり残聴があったのではないかという人もいます。いつか、はま子さんが私に、満喜子先生が今度新しい補聴器のお世話をしてくさる、そしたら聞こえるようになるらしいと、嬉しそうにいわれたことがありました。しかし、聴力検査の結果か、何かの事情で、補聴器の話はそれっきりでした。残聴はあったようですが、補聴器の使用は見たこともなく、直接残聴を活用されたとも

思えませんでした。電話はよく使っておられたましたが、1人ではなく、通訳の助けを借りておられました。

私が付き合ったはま子さんとの3年間は、はま子さんの30代の後半でした。学園はキリスト教の学校で、控え目な生活でした。はま子さんは目立たない地味な服装で、質素な暮らしぶりでした。

私ははま子さんを最もはまらしいと思ったのは、こうした対人関係の行動の中で、ときばき働く姿でした。当時、はま子さんのご兄弟は4人でしたが、うち3人は近江兄弟社の社員で、学園に勤めておられました。学園や近江兄弟社全体は、我が家の延長のような雰囲気がありました。わけでもはま子さんは同僚から慕われ、園長の片腕の様でもあったのですから、はま子さんは職場で十分に活躍できたわけでした。天才的だと言われた口話力は、こうした環境を得て「普通人はま子」を目指して行ってもおかしくありませんでした。



はま子さんの事を語るとき、物のいえない子供に物を言わせた父上西川吉之助先生の深い愛情と努力が話の中心になっていますが、はま子さんを6歳の時から手許に預かり、父上の努力によって上達した口話を精神的に成長させ、実生活に活用させた一柳満喜子先生の紹介もここでさせて頂きたいと思います。

先生は明治17年、兵庫県（播磨）の小野藩主一柳末徳の3女に生まれ、神戸女学院音楽部の第1回卒業生で、その後渡米、東部の名門プリンマー女子大学に学び、小児麻痺の学生と同宿され、これを援けるなど、社会事業にも打ち込んでおられたが、8年後帰国、ヴォーリズと結婚されました。

一方、メレル・ヴォーリズ（一柳米来留）は明治13年アメリカ、カンザス州に生まれ、24歳で来日、県立八幡商業学校の英語教師になりましたが、バイブル・クラスの活動に熱心で学校を解雇されました。ヴォーリズは建築に興味があったので、当地に残り、建築設計の事業を始めました。環境にも、人にも優しく彼の仕事は次々社会に迎えられ、関西学院、神戸女学院、などの学校設計、個人の住宅、さては心齋橋大丸や旧大同生命ビルなど、多くの建物を残しました。又、家庭薬メンソレータム（現メンターム）をアメリカより導入、日本で製造販売しました。

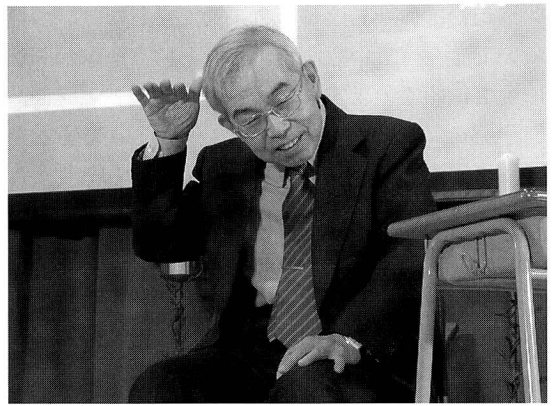
こうした事業の利益で、学校、病院、図書館などを運営する近江兄弟社を起こしました。満喜子先生は大正11年、清友園幼稚園を開園、地域の幼児教育を進めていましたが、昭和22年から幼、小、中、高をふくむ現在の総合学園、近江兄弟学園に発展させました。

ある時、満喜子先生から次のように教えていただいたこともありました。皆とおしゃべりしていたときでした。私はこんな言葉使いをしました。「はい、分かりました。おうちに帰って、お母さんにお話してみます」と。それを聞いておられた満喜子先生は後で、私に注意されました。

「杉田さん！おうちや、お母さんなんて言葉は小さい子供さんがつかうものですよ！あなたの精神年齢は青年ですが、生活年齢は幼稚園の子供さん並みですね！」そう言われて私ははっとしました。人前で「お母さん」なんて言葉使いをしないことは、私の小学生時代既に卒業しているはずでした。ところが聾学校に入学して口話を学ぶと、「父」、「母」と言っても唇は殆ど動きませんが「お父さん」「お母さん」と唇を動かすと話が読み取りやすいです。だから聾学校では、高等部になってもこんな言葉使いが生きているようです。

しかし、言い訳はどうしてもあれ、これでは世渡りはできないのです。精神年齢と生活年齢のアンバランスを直していくことがたいせつです。「聴力障害者と社会性」とも言われています。聞こえても、聞こえなくても人間として大切です。はま子さんと私は年齢も、教わった内容も違いますが、同じ満喜子先生にこの学校で教わったことは有難いことでした。

さて、はま子さんはこのように口話を身につけ、



実社会でそれを活用した優れた聴障者でありましたが、大きく言って、二つの人生のつまづきをされました。一つは結婚の失敗であり、今一つは二度の学園退職と転職を続けられたことでした。はま子さんの口話を称えるあまり、こうした私生活に触れることは控えられていたようですが、はま子さんの業績を今日的な意味で、評価するとき、はま子さんを口話という一面でのみ捕らえることは正しい人間理解であるとは思えません。

年表に寄れば昭和18年太平洋戦争も次第にたけなわとなり、勤務の大阪市立聾学校も殆ど閉鎖の状態となっていました。西川家も父吉之助の死後、弟昌三、母君、妹幾子、長男伝一死去と不幸が続く、はま子も急激に宗教的関心を深めて行った。

姉昌子の回想によると、「はま子は昭和18年の秋、突然帰宅し、結婚すると告げた。一応の話を聞いてから、順々と相当の反対したにも関わらず、翌19年1月、大阪で市立校長や、教頭のお世話で、同僚の方々に囲まれて結婚式を挙げた。戦争は日と共にし烈をを加え、11月、夫の郷里である福島県桑折町に移り、戦後22年1月まで、ずっと生活苦にひしがれ、年とった舅と、職のない夫とに仕え、村内の百姓の手伝いをしたり、編み物の手内職をしたりしても追いつけない、惨めな生活に直面し、結婚する前に聞いた話とまるで食い違った現実と、夫の架空の経歴がのしかかってきて、一層虚脱な状態におちこんだ。

やがてはま子は着のみ着のまま、小さな風呂敷包み1つをさげて、前の姿、西川はま子として近江八幡に帰ってきた」と書いてあります。

浅野さんは読話も手話も出来なかったので、夫婦の会話は筆談だけでした。それではま子さんの口話力が落ちたようでした。はま子さんは聾教育

誌に次のように言っておられます。「私自身、口話能力をつけている以上、その能力を低下させてはならないという考えもあって大変苦しみ、その解決の方法として離婚を選んだのであります。

この離婚の弁に、江東聾学校の乾尚さんは「人間生活の最も根源的なものである結婚生活をつぶしてまで、口話を死守しようとする非妥協的な孤高の精神からは、豊かな大成は期待できない」と言われ、また、京都聾学校の渡邊繁義さんは「口話能力の低下を心配するあまり、職を変えたり、離婚すると言うのでは、人間の幸せや、尊さを教える一般通念の意義を何処に見出せるのか。口話能力を保つことを、自分にも、又他からも強制された生涯を終わったはま子さんは、この点だけからでも不幸な方だった」

昭和56年、滋賀大学教育学部で開かれた日本特殊教育学会第18回大会のプレシンポジウムで、西川父娘の教育面での遺産を求め、昔時の関係者を訪ね、取材もしましたが、はま子さんの結婚では、関係者の殆どが物故され、僅かに大阪市立校の元同僚で、高橋校長の依頼ではま子さんに手話を教え、何かと世話を見たと言う聴障者に会いました。その方の説明では、独身主義のはま子さんが結婚していたとは初耳だと驚き、同じ学校で、同じ障害者なのだから、結婚していれば分かる筈なのにと首をかしげていました。浅野さんは昭和25年に上京、その後は故郷でも消息を全く知らないとの事でした。

はま子さんのもう一つの躓きは、昭和29年6月、一柳夫妻が学園の事業拡大のため、渡米中、学園に辞表を出し、上京してしまったことでした。原因は東京から転任してきた女教師と学園女子寮で共同生活をしていたのですが、二人で家を借りて抜け出し、女教師は間もなく退職、はま子さんもその跡を追って辞表を出し、上京してしまったのであります。渡米中の満喜子先生は帰国まで辞表を預かったままにされたのですが、はま子さんは振り切ってしまいました。はま子さんは「言葉を求めて40年」の中で、退職の事情を「後進に道を譲る為」と説明しておられますが、これは事実とは違うようです。

はま子さんが一番最後に就職されたのは、昭和32年5月、三重県四日市にある病院でした。院長にはろう幼児があり、はま子さんはこの病院の

栄養士兼家庭教師として務められたのであります。しかし、院長夫妻には、実はもう一人の年配の家庭教師が迎えられており、日ならずして二人の家庭教師の間に溝が出来て四日市を去る決心をされました。

## 川本口話賞

さて、話が少し前後しますが、昭和31年6月、川本宇之介先生退職記念口話賞の発足がありました。その第1回受賞者にはま子さんを選出したのであります。はま子さんの紹介記事や、その手記は毎号のように「ろう教育」誌を大きく飾りました。同年3月「耳の日」呉聾学校での講演は「ことばを求めて40年」という小冊子になり、全国の聾学校に配布されて、大きな反響を呼びました。各地の聾学校やPTAは争って講演会を設け講師に招きました。九州では、校長会の折に、はま子さんの講演の日程を調整される程でした。

日本のろう教育界は、はま子さんに数多くの賛辞を贈りました。曰く、日本のヘレン・ケラー、世界に誇ることの出来る日本のろう教育の金字塔、ろうあ者の鑑み、言葉の権現、神か仏の仕業、当等最大級の褒め言葉がはま子さんに浴びせられたのであります。

はま子さんが講演に回った学校では、校長室や、職員室にはま子さんの色紙が飾られ、東北のある聾学校では、「西川はま子先生来校記念日」が制定され、その日を学校行事として取り上げるほどの過熱でした。それ程日本中の聾教育者から称えられたはま子さんが、一面こうした躓きを重ねたことは何によるのでしょうか？

満喜子先生は、私に「はま子さんは幼い日、口話式聾教育の看板に父上に使われ、日本全国を引き回され、舞台上に乗せられた事が非常に害をしました」とよく嘆いておられました。昌子さんも「全国に旅をし、口話法の啓蒙に務めたことははま子にも良い社会教育であったが、反面、人に持ち上げられることが当たり前になり、はま子の性格の一大欠点になった」と同じように嘆いておられます。ある時、満喜子先生は、「東京へ行って独立不可能、これは能力の不足ではなく、全く人格の欠点からでした」と言い切られた事さえありました。

幾度か、満喜子先生の許を飛び出し、その度に

悔いて先生の膝元に帰って来たはま子さん。「東京での失敗の価は高くついたけれど、はまさんは今非常に謙虚な人になりました」と語っておられた晩年の満喜子先生。はま子さんにとっては生涯を通じての心の母親であったと思います。かくて、昭和32年8月、はまさんは波乱に富んだ生涯を閉じられたのでした。享年41歳でした。

### 赤貧、洗うが如く

四年前、札幌で第9回日本聾史大会がありました。中根伸一さんのご案内で小樽の歴史ツアーがあった由です。この写真は小樽湾の入り口、オショロにある石碑で江刺追分が記されています。

“オショロ 高島 およびもないが  
せめて歌棄 磯矢まで“

この四つの地名は、鯨の豊かな漁場で、西川家が独り占めをしておりました。地元の漁夫はオショロ、高島は仕方ないが、せめてその半分、歌棄、磯矢は地元に戻してほしいと歌われています。

この絵は日本海を北上する北前船です。こうして近江商人初代西川伝右衛門は巨額な利益得ておりました。航路の安全を祈り、この北前船の絵馬

は近江八幡のお寺に寄進されておりました。

「不在漁業主」は次第に認められなくなり、西川家は二つの漁場を失い、昭和の始めには残りの漁場も失いました。昭和12年には西川家の親族が集まり、教職を捨てて家業を継ぐか、あくまで教職を離れないか決断を迫りましたが、彼の道を変えること出来ませんでした。不運は重なり、昭和の始め、鯨の不漁となり、鯨は殆ど寄り付かなくなり、漁業主の倒産が続いた。

昭和12年、西川吉之助は近江八幡の本家を売却、草津の県立聾話学校正門前の小さい借家に移り、昭和15年、吉之助は昭和15年自殺、一家は近江八幡に戻っています。しかし、今は戻る家は無く、古い民家に間借りをして、姉と妹との共同生活を続けました。

徳川義親は晩年回顧しております。「西川さんの口話教育の絢爛たる成功に眩惑されて、聾者の福祉のことも、西川さんの生活のことも忘れていたのでした。西川さんをあれほどまで落とし込んでしまったことをなんとも申し訳の無いことでした」「赤貧、洗うが如し」であったとも語っています。




2006年札幌大会・小樽ツアー 江刺追分記念碑



## 【 参考資料 】

### 「西川はま子の歩んだ道」

(西川はま子 年譜)

- |              |  |  |
|--------------|--|--|
| 大正5年(1916年)  | 西川吉之助3女として出生                                   |  |
| 大正8年(1919年)  | 京都府立医大耳鼻咽喉科で診察の結果、聾と判明、父吉之助は口話法による教育を始める。      |  |
| 大正11年(1922年) | 近江八幡仲屋町上の本宅に帰った。吉之助、はま子の教育を一柳満喜子に依頼、一柳家を教室に使う。 |  |
| 大正14年(1925年) | この頃から吉之助はま子を連れて全国に講演、実演、を行う。                   |  |
| 昭和3年(1928年)  | 滋賀県立聾話学校創立、はま子町立八幡女学校合格。                       |  |
| 昭和6年(1931年)  | 2, 3年前より小樽の漁場不漁となり、家計苦しくなる。                    |  |
| 昭和8年(1933年)  | 病気の為1年休学、八幡高等女学校を卒業、滋賀県立聾話学校寄宿舎看護人となる。         |  |
| 昭和9年(1934年)  | 近江兄弟社幼児教育研究所入所。                                |  |
| 昭和12年(1937年) | 口話教育普及の為家財蕩尽、近江八幡の本宅を売却、草津の聾学校前に移る。            |  |
| 昭和14年(1939年) | 口話教育から手話教育に転進したいと行動を始める。大阪市立聾学校に高橋潔校長を訪ね採用を依頼  |  |
| 昭和15年(1940年) | 父自死、家族近江八幡に引き揚げる。 保母免許を取る。                     |  |
| 昭和16年(1941年) | 大阪市立聾学校嘱託教員となる。                                |  |
| 昭和18年(1943年) | 戦争により学校閉鎖                                      |  |
| 昭和19年(1944年) | 浅野新次郎(中失)と結婚、夫の故郷福島県桑折市に疎開。                    |  |
| 昭和22年(1947年) | 協議離婚、近江八幡の姉の許に帰る。                              |  |
| 昭和23年(1948年) | 近江兄弟社学園に就職                                     |  |
| 昭和26年(1951年) | 調理師、栄養士試験に合格                                   |  |
| 昭和29年(1954年) | 一柳満喜子園長途米中退職、上京                                |  |
| 昭和30年(1955年) | 3度、姉の許に帰っている。                                  |  |
| 昭和31年(1956年) | 川本口話賞を受賞、各地で講演、四日市で家庭教師をする。                    |  |
| 昭和32年(1957年) | 8月2日、急性血行性結核により死去、享年41歳                        |  |

## 【参考資料】

### 記念講演 「西川はま子の歩んだ道」

(一柳米来留と近江兄弟社) メレル・ヴォーリズは明治13年アメリカ、カンザス州に生まれた。コロラド大学を卒業後、24歳のとき来日、滋賀県立八幡商業学校の英語教師になったが、バイブル・クラスの活動に熱心で学校を解雇された。ヴォーリズは建築に興味があったので、当地に残り、建築設計をはじめた。環境にも、人にも優しくかった彼の仕事は次々社会に迎えられ、関西学院、神戸女学院、などの学校設計、個人の住宅、さては心齋橋大丸や、旧大同生命ビルなど、1600以上の建物を残した。又家庭薬メンソレータム(現メンターム)をアメリカより導入、日本で製造販売した。こうした事業の利益で、学校、病院、図書館などを運営する近江兄弟社を起こした。昭和16年、ヴォーリズは日本国籍を取得、一柳米来留(ひとつやなぎ・めれる)と改名した。昭和33年、近江八幡市名誉市民に推された。昭和39年、昇天、享年83歳。



(一柳満喜子)は明治17年、兵庫県(播磨)の小野藩主一柳末徳の3女に生まれた。神戸女学院音楽部の第1回卒業生で、その後渡米、東部の名門プリンマー女子大学に学び、9年間社会奉仕などに活躍、帰国後、大正8年、ヴォーリズと結婚、近江兄弟社幼稚園を創立した。昭和22年から26年にかけて小学校、中学校、高等学校を含めた総合学園とした。西川はま子を6歳の頃から指導、その生涯を心にかけておられた。学園のみならず全兄弟社の精神的支柱であった。身体障害者に深い理解があった。昭和44年、昇天、85歳であった。

#### (一柳満喜子の教えから)

「おうちや、お母さんなんて言葉遣いは幼稚園の子供さんがつかうものですよ、あなたの精神年齢は青年ですが、生活年齢は小さい子供さん並みですね！」唇から話を読み取る聾学校では、高学年でもこうした幼稚語が使われる。しかし普通社会では認めてもらえない。精神年齢と、生活年齢のバランスのとれた人間になることが・・・

「人間の努力に甲、乙の差はありませんよ！体に障害があろうと、無かろうと、努力の成果は100パーセント現れます。それが素直に認められる公平な社会を一緒に作っていきましょう！」